



# 欠陥品の文殊使いは 最強の希少職でした。3

⌒ L P ⌒ ⌒ L I G ⌒ T

登龍乃月

*Toryumonotsuki*



# 主な登場人物

Main Characters

## クライシス

かつて世界を救った  
伝説の大魔導師。本名は  
クライスラー・ウインテッドボルト。  
フィガロの魔素の影響で  
若返った。

## リッチモンド

二百年前に死亡し  
アンデッド化した青年。  
クライシスの魔法で  
人間の姿を取り戻す。

## フィガロ

本編の主人公。  
魔法が使えず勘当されたものの、  
クライシスのもとで  
秘められた力に目覚める。

## オルカ

ランチャ自由冒険組合の  
総括支部長。  
義理人情に厚く、  
荒くれ者にも慕われる。

## シャルル狐

シャルルが使役する  
シキガミ。  
人型にも変身可能。

## シャルル

ランチャ守護王国の王女。  
刺客の襲撃に遭うも、  
フィガロに命を救われる。

## クーガ

フィガロの力で  
変異した魔獣。  
高い知能と戦闘力を  
併せ持つ。

冒険者として登録するため、俺——ファイガロは、自由冒険組合ランチア支部所を訪れていた。

総括支部長オルカとの面談を経て、演武場へ移動。そこで魔法の適性試験をクリアした俺は、特例が認められ、剣技試験抜きで別室へ通された。

通された部屋は簡素な造りになっていて、石床やレンガで作られた壁が剥き出しになっている。

中央に事務机が置いてあり、机と向かい合わせに木製の椅子が四脚置いてあった。

年季が入った色合いの事務机の前には、自由冒険組合の事務官であろう人物が座っており、書類を睨んでいた。

事務官は眼鏡をかけた、感じの良い青年だった。俺が入室すると、柔和な笑みを浮かべてくれる。

「こんにちは」

「こんにちは、よろしくお願ひします」

俺が着席すると、青年は簡単な挨拶の後、自由冒険組合の規則や注意事項の説明を始めた。

低等級でいる間は、色々と細かい制限が多いらしい。

自分の実力をきちんと把握する必要性や、油断しているとモンスターに殺されてしまうという基本的な心構え。

また、個人的に受けた依頼は自由冒険組合の補償や優待などの対象外であることや、相応しくないと判断された場合は、等級の剥奪、降格もありえることなど。

駆け出しの冒険者にはありがたいお話だった。

他にも、冒険者には【八つの遵奉】という規律があり、それを遵守せよ、と言われた。

驕り高ぶるなかれ

勇気と蛮勇を取り違えるなかれ

弱者には手を差し伸べよ

正直であれ

名声を求めるなかれ

冒険を敬愛せよ

未知への貪欲さを忘れるべからず

不要な殺戮は控えるべし

これらが【八つの遵奉】だった。

規則の説明を受けた後は登録の書類に記入した。そして、「良い冒険を」と事務官から鉛色に鈍く光る十等級のタグを受け取った。

簡単に整理すると、自由冒険組合には等級という制度がある。

十等級から一等級、一等級から上は、銀等級、白金等級、ミスリルに上がっていく。

一等級まではゴロゴロいて、銀等級、白金等級、ミスリル、と上がるにつれ、その数も減っていく。

そしてアダマンタイト、ヒヒロカネの冒険者はほとんど存在しない。伝説的、英雄的な強さを持ち、冒険者の頂にいて、皆の憧れのような存在らしい。

ランシア支部には銀等級、白金等級やミスリルこそ在籍しているものの、それ以上の境地に至る冒険者は、まだ一人も出ていないそうだ。

目安ではあるが、隣国で剣聖と呼ばれる人物——つまり俺の兄様、ルシウス・アルウィンがヒヒロカネと同程度だと言われている。

さて、依頼に関しては、事故や人的被害を防ぐために、適正等級以上の依頼は受けられないようになっていく。それでも、自分の実力を過信した冒険者による死亡事故が後を絶たないのだとか。

一週間に一度、実技と面談による昇級試験が行われ、合格すれば一つ上の等級へ昇格す

る仕組みらしい。

自由冒険組合が斡旋する依頼は、大きく分けると討伐系と採集系の二つ。

討伐系は、害となるモンスターや異常繁殖してしまったモンスターを対象にする討伐依頼や、武器や装飾品、特殊な薬品などに使うモンスターの素材を集める狩猟依頼がある。

採集系は、回復薬やその他一般薬の原料となる様々な薬草や植物を採したり、昆虫類や特殊な木材など依頼に応じた素材を集めたりする依頼が多い。

中には鉱山に潜り鉱石などを掘る、などの冒険者とは無縁そうな依頼もあり、その依頼の種類はかなり多岐にわたる。

聞くとところによれば、採集系の依頼だけをやっていても生活には困らないのだそうで、それ専門のパーティもいるらしい。

基本的に自分の等級内であれば、どのような依頼を受けても構わないが、組合が危険だと判断した場合、人員追加を指示される事もあるんだとか。

これも冒険者の命を守る措置なのだろう。

人員追加を断って無理やり依頼先へ行つた結果、無残にも全滅、というケースが多いため、基本的に断る冒険者はいないらしい。

命大事に、つてことだな。

帰ってくればまた行ける、帰れなければ……そこで人生が終わるのだから。

依頼を受け、そのモンスターから取れる素材や、依頼された品物以外の素材は、組合に併設されている素材管理部が、優先的に買い取ってくれる仕組みになっている。

素材にはランクがあり、高ランクの物は高値で取引されている。

その中で高品質と見なされるのは、状態のいい物や付加価値のある物、希少な物など。

剥ぎ取りで得られる素材は、剥ぎ取りの技術が問われるため、価格の変動が大きいそうだ。依頼などでパーティを組みたい場合はどの職と組みたいか、条件、報酬の振り分けなど、細々した項目を申請書に記入し、組合の依頼掲示板に張り出せばいい。



「やあ、おかえりフィガロ。登録は無事終了したようだ。最後に、例の従魔を見せてもらいたいのだが」

冒険者としての説明を受けた後、俺は最初に案内された部屋に戻ってきていた。

どうやらこの部屋は、オルカ支部長の執務室兼私室になっているらしい。

天井の高さも部屋の広さ的にも、ここでクーガを出しても問題はなさそうだ。

「分かりました。では少し離れていてください、私の従魔は結構大きいので」

「あい分かった。ここらでいいかね？」

オルカ支部長は窓際まで下がり、広背筋を見せ付けながらポーシングをキメた。  
「だ、大丈夫かと。クーガ、出てこい」

『オン！』

いつも通りに影の中から出てきたクーガは一度俺の周りをぐるりと回り、左隣に座って落ち着いた。

『マスター、あの岩のモンスターは？』

「あの人は自由冒険組合の偉い人だ。礼儀正しくしような」

『は、マスターの仰せのままに』

『喋った……？ は……は……こりやすこい……』

オルカはクーガの姿を目の当たりにするとポーシングをやめ、引きつった表情でクーガを見つめていた。

対してクーガは尻尾をゆっくりと床に打ち付けて、オルカの様子を窺っているようだった。

「なるほど……こいつは大した従魔だ……大きさもそうだが、貫禄というか実力に裏打ちされた自信というか、大物感がすごいな……これでは私でも勝てるかどうか……うむ……これほどの魔獣を役使するとは、さすがは陛下に認められた男という事だな」

呆気に取られた顔をしていたオルカだが、途中で腕を組み、値踏みするようにクーガの



体を眺め始めた。

「ありがとうございます。こいつは知能も高いですし、オルカ支部長に勝てるかどうかは分かりませんが、戦闘能力も高いです。ちなみに今連れているのはこのクーガだけなのですが、もう一体従魔がおりまして」

「何い!? そいつもこの従魔と同程度なのか!？」

「あ、いえ、もう一体は小さいです。多分」

こう伝えておけば、王女であるシャルルの使用するシキガミを、俺のもう一体の従魔としてオルカは認識するだろう。

まだ、使役魔法の使い手であるアルピナからシキガミを借りる許可を得ていないが、ダメだったらダメで、俺のバルムンクを見せればいいだけだ。

「多分……? まあ出来れば今日連れてきて欲しかったのだが……いないというなら仕方ない。よし、陛下の書面にある通り、従魔の使役を認めよう。ただし従魔専用の鎧と鞍をつけるようにしてくれ。そうすれば街中でも騎乗してかまわん。ルシオ君の所であれば取り扱っているだろう。このランチアには従魔を使役する冒険者はいないから、特注になるだろうがな」

複雑な表情をしながらオルカが椅子に腰を下ろし、革張りの椅子はギシギシと悲鳴を上げてオルカの巨体を受け止める。

ゴーレムのような巨体が椅子にちょこんと納まる様は、少し可愛らしくも見えた。

しかし特注か……お金、どれくらい必要なんだろう。

「あの……つかぬ事をお聞きするのですが、特注だといくらぐらいかかるのでしょうか……?」

「うーむ。素材を全て自分で揃えるなら……鞍だけであれば金貨二枚くらいだと思うぞ? そちらへんはルシオ君と相談してみるといい」

「金貨二枚……ですか……」

「なあに十等級でも一週間ほど死ぬ気で依頼をこなせば金貨一枚や二枚、容易い容易い!」

「はあ……分かりました……」

『鞍? とは何でしょうかマスター』

俺とオルカが話している間、静かにしていたクーガが首を傾げながら尋ねてきた。

「移動用の獣に乗る場合につける、装具みたいなものだよ。それがあれば街中を堂々と歩けるんだぞ? まあ俺を乗せている場合という限定条件だけだな」

「装具! この私にも装具をいただけるというのですか!? 何という素晴らしい事か! 感謝の極みにございます!! ウオウ! ウオオオー!」

俺の言葉が余程嬉しかったのか、何度も小刻みに遠吠えを繰り返して歓喜を表すクーガ。

最後に出した声は、先日王宮で出したものとはかけ離れた野太く雄々しい哮りだった。

尻尾ははち切れんばかりにグルングルンとすごい速度で回転。床に当たる度に、ボタンボタン！と大きな音が鳴った。

その音に紛れてガタン、という音が鳴り、音がした方を向けば、座っていたオルカが椅子を蹴り倒して、身構えているのが見えた。

「おいおい……思わず立ってしまったが……フィガロ！ よっぽど嬉しかったのか知らんが、クーガ君に少し限度つてものを教えてくれないか！ 威嚇などではないのだからが、闘気がピンピン伝わってきて思わず身構えてしまったぞ」

「す、すみません。おいクーガ！ 聞こえたらー 遠吠えをやめろー」

『はっ！ 大変お見苦しいところをお見せいたしました。申し訳ございません』

「ふう……ありがとう、クーガ君。年甲斐もなく取り乱してしまった。見苦しい姿を見せたのは私も同じだ、許してくれ。クーガ君は力のセーブというものを覚えるように。フィガロも同じだ。分かったな？」

額の汗を拭う仕草をしながらオルカが言った。

俺とクーガが頷いた直後、廊下から大勢の走る足音がこちらに向かっているのが聞こえた。

「支部長！ ご無事ですか！」

「オルカさん！」

「しぶちょおお！」

「支部長はんだ丈夫かいな！」

「敵襲……？」

廊下を走る足音はみるみる大きくなり、声を荒らげながら、五人の男女が扉を蹴破るように突入してきた。男女は恐らく冒険者達のパーティーだろう。

軽装備で身を固めている男や魔導師風の少女、ハンターらしき風体の女性などが皆それぞれに武器を持ち、血相を変えていた。

「なんだお前達！ この部屋には無断での入室を禁じているだろう！ それに武器など持ち出して何を考えているんだ！」

入ってきた五人の男女を、開口一番で怒鳴り付けるオルカ。俺とクーガは状況を掴めずに、呆氣に取られてその光景を見ていた。

「な！ モンスタ！ どうしてこんな所に！」

「でつかい狼……！ こんなモンスタ知らないわよ！」

「ただ座っているだけなのに……何だこの狼から感じるプレッシャーは！」

突然慌たしくなった室内でどうしていいか分からず、俺とクーガは固まってしまった。「静かにしろ！ 騒々しい！ この狼はこの少年の従魔だ！ 武器をしまえ！」



オルカの怒号が飛び、飛び込んできた冒険者達はたじろぎながらも武器をしまう。  
だが目線はきつちりと俺とクーガに向けられていて、どうにも居心地が悪い。

「突然遠吠えが聞こえたと思ったら、下の階までとんでもない殺気のような波動が流れ込んできたんだ。低等級の冒険者達なんて泡吹いて倒れちゃった!」

どうやらクーガのテンションを振り切った遠吠えが、階下でとんでもない事態を引き起こしてしまったらしい。

クーガを横目で見ると、申し訳なさそうに耳を伏せて項垂れている。

力のセーブ、覚えような。

「今の遠吠えはこのフィガロ君の従魔、クーガ君が発したものだ。害はない、ちよつと力の加減を間違えただけだ」

「従魔……ですって!？」

魔法使い風の少女が、驚愕しながら言った。

「これが……従魔の放つ力のプレッシャーなのか……信じられない」

「でも綺麗な毛並みや……体毛の模様もエライカッコええなあ」

「見てあの瞳、気高い魂の輝きに満ち溢れているわ」

「あの丸太のような四肢、オルカ支部長にも負けず劣らずの強靱さに違いない」

「この少年がこの従魔の主ですって？ まだ子供じゃないの」

入口に陣取っている冒険者達が、クーガを見た感想を次々と口にする。いや、まあもう子供扱いされるのは慣れたからいいけどさ。

「マスター、あの女、マスターを子供扱いしております。噛み殺してもいいでしょうか」

「やめてくれ、不必要なトラブル起こしてどーすんだよ。ここは穏便にいくんだ、元はと言えばお前が調子に乗るからいけないんだぞ」

『ぬぐ……面目次第もございません……』

クーガが俺の耳にそつと口を寄せ、物騒な事を言い出したので少し強めに注意してしまった。

それに成人していると言っても、まだ世間的に見れば子供だという事には変わらない。ましてや俺を子供と言ったのは、俺よりも一回りは年上そうなお姉さんだ。こればかりは致し方ないだろう。

「詳しいことは後で話す、今は下がれ。階下で倒れた者達の手助けをしてこい」

「だが支部長さん!」

「いいから行けと言っている!」

一際大きい怒号が飛ぶと、集まった冒険者達は仕方なさそうに扉を閉めて出て行った。扉が閉まり切った数秒の後、深いため息がオルカの口から出た。

「全く……クーガ君。力の加減を誤るところといったトラブルにもなりやすい。分かってく

れたか？」

『理解いたしました。今後は気をつける所存です。マスターへもご迷惑をおかけしてしまい申し訳ありませんでした』

そう言うと、クーガはクーンと小さく鳴き、床に伏せて、下を向いてしまった。

勢いよく振られていた尻尾も股の間にしまわれており、完全に意気消沈してしまっている。

ここまでしょぼくられると、逆にこっちが悪いかのような錯覚に陥ってしまう。

「大丈夫、ちゃんとクーガに色々教えなかった俺が悪いよ。そして申し訳ありませんでしたオルカ支部長」

「うむ。あの冒険者達は白金等級の者達で、なかなかの熟達者達だ。ゆえにあのような行動を取ってしまったのだろう。仕方がないので許して欲しい。皆には私の方から説明しておくから、今後、こういった事がないようにしてくれよ？　だがまあ今回の件で、冒険者の中に従魔の遠吠えで気を失うレベルの輩が多いと分かった。これは今一度、昇格試験などの見直しを考えるべきだな」

オルカは声のトーンを通常に戻し、諭すように言ってくれた。

こうして、低等級とはいえ、冒険者達を遠吠え一発で失神に追い込んでしまったクーガの、華々しいお披露目が終わったのだった。



騒動の後、オルカから解放された俺はクーガを影に入れて、階下の依頼掲示板の前に来ていた。

白金等級の冒険者に顔を知られてしまったのと、遠吠えで失神者が出てしまったという理由で、装具をつけるまでは組合内に入れる事を禁じられてしまった。

他国と違い、従魔の存在が浸透していないランチアでは怖がる一般人もいるので、鞍などの装具が出来るまでは外に出すな、とも言われた。

屋敷が拠点になると話したところ、庭先に出して、ご近所にクーガの顔を売っておけとも言われた。

そんなに神経質になるほどの事なのか？　とも思ったが、とりあえずは言われた通りにするつもりだ。

この世界には獣人や亜人、巨人族などの別種族も存在するが、ランチアの街中でそう言っただけの人種を見かけるのは珍しく、そのほとんどが冒険者に身をやつしている。

冒険者の中にも従魔を使役する者はいないので、街中に大型のモンスターが闊歩するという事態がない。それゆえの処置なのだろう。

ランチア守護王国に在住するのは、ほぼほぼ通常人種だ。

かと言って他種族に対しての差別用語や卑下する言動も見聞きした事がないし、少なくとも他人種もいるので、通常人種至上主義というわけでもなさそうだった。

「さてさて……何だかんだあったけど、無事に十等級のタグももらったし、早速依頼を見てみよう。何があるかな……とりあえずご飯食べたいから、サクッと串焼きが食べれるくらいのお仕事は……」

実のところ、起きてから今まで何も口にしていないのでお腹の虫が鳴りっぱなしなのだ。先に依頼を受けてお腹を満たし、その後ルシオのいるタルタロス武具店へ。クーガの鎧と鞍の話をして、トワイライトに寄ってシキガミについての相談をする予定だ。

今後の予定を組みながら首元に揺れる、鉛色に鈍く光る小さいタグを指で弄び、依頼が張り出された掲示板に目を通す。

迷子の犬探し、人探し、どぶざらい、草むしり……散歩代行……なんだこれ？

十等級が受けられる依頼って、こんなものしかないのか？

理想と現実のギャップに頬を引きつらせながら依頼書を見ていると、良さげな案件を見つけた。

「害虫駆除、か……対象は【ジャイアントクインビー】。これにするか」

掲示板の下の方に張り出されていたそれを剥がして詳細に目を通す。

「屋敷の裏庭に巣食ったジャイアントクインビーを処理して欲しい……成功報酬は銀貨一枚。なお、巣にいると思われる幼虫の捕獲数だけ銅貨をプラス！ これは熱いんじゃないか？ 銅貨一枚で串焼き一ダースは買える！ 銀貨一枚で銅貨十枚だったよな……うお、おとお！ 串焼きが百二十本も食えるぞ!! 冒険者万歳!」

依頼書を手に小躍りしつつ受付へと並ぶ。

今の時間は人が少ないのか、すぐに順番は回ってきた。

「あら、フィガロ様……さん……えっと、合格おめでとう、初仕事ね？ オルカ支部長から話は聞いているわ。詳しい事は教えてくれなかったけど貴方のことは一介の冒険者として扱えと言われているわ。もちろん王家の書面を持っていた事は内密にしておけと厳命されているから安心してちょうだい？ さあさあそれじゃ……えっと……クインビーね、支部長いわく貴方、可愛い顔してミスリル以上の素質を持っているらしいじゃない？ 十等級から一等級までのお仕事に関しては、ソロでも問題ないと太鼓判を押されているわ。人員などは気にせず好きな依頼を受けて行つてね。ああ、もちろんその等級にあったものじゃないとダメだけれどね?」

「あはは……ありがとうございます」

「この依頼は組合に報告しないでもいいわよ。報酬は依頼主から直接支払われるタイプだからね、それじゃ行つてらっしゃい」

「はい！ 行ってまいりますお姉様！」

「やだ……お姉様だなんて……」

照れ臭そうにはにかむ受付嬢から依頼主の家までの地図をもらい、建物を出て意気揚々と道を歩く。

太陽は天空の頂点を過ぎ、だんだんと沈みかけている。

急いで依頼をこなせば、閉店ギリギリにはタルタロス武具店に行けるだろう。

腹の虫がたまに鳴るが、気にせず地図を頼りにずんずんと歩いていった。

今までは分からなかったが、往來する人々の中に冒険者の姿をちらほらと見かける事が多い。首元に揺れる等級タグがその証だ。

「思ったより歩いているもんなんだなあ……」

冒険者だつて食事をするし、買い物もする、娯楽だつて楽しむ、考えてみれば当たり前の事なのだが、今では何事も新鮮に見えて楽しくて仕方がない。

こんにちはニューワールド、こんにちは冒険者。

「ここか……屋敷でつか……さすが伯爵家。佇まいが違うわな……」

テクテクと道を歩き、辿り着いたのは七区画にある伯爵家の前。俺の屋敷の倍はあろうかという敷地の広さ、敷地は全て塀で囲まれていて、中の様子は門からでしか分からない。アルウィン家は公爵位ではあったけれど、家自体はそこまで大きくなかった。

それでも俺の屋敷よりかは大きかったけれど、目の前に広がる伯爵家ほどではない。

「どうかしましたか？」

俺が門の前で立ち尽くしていると門番が怪訝な顔をして尋ねてきた。地図を持って口を開けながら見上げている人が門の前にいたらそりゃ怪しむ。無理もない。

「はい、自由冒険組合から依頼を受けて来ましたフィガロと申します。ご依頼の件で伯爵様に御目通りをお願いしたいのですが、よろしいでしょうか？」

「なるほど。フィガロさんですね……ちよつと待っててください」

門番は門のそばにある小型の箱に向けて何かを喋っている。あれはアルウィン家にもあった箱形の通信用魔道具で、短距離の即時通信を可能にする物だ。原理はワイスパリーングと同じだ。

「お入りください。ご案内いたします」

「はい、お手数おかけしますがよろしくお願ひいたします」

中の人物に了承を得たのだろう。門番は門を開け、俺がくぐるとすぐに施錠して元の位置へ戻った。

屋敷の方へ目を向けると、伯爵家の執事が屋敷からこちらに歩いてくるのが見えた。執事に屋敷の中へと案内され、ラウンジのソファへと通された。

「こちらでお待ちください」

室内は白と茶色で統一されており、家具や階段など、木で出来た物は全て無垢材で構成されていて主人のこだわりを感じさせる。ソファはやや柔らかに作られており、長く座つても疲れを感じさせない、上質な一品だという事が分かる。

「お待たせして申し訳ないフィガロ殿！ ちよつとバタバタしていたものでな。おい！ 何をしている！ フィガロ殿にお茶も出さんのか！」

おかしい。

なんだか俺を知っているような口ぶりだ。

伯爵であろう人物はちよび髭を生やした瘦躯の男性だが、俺の記憶にはない人物だった。自由冒険組合の、しかも十等級の相手にここまでするだろうか？

と俺が疑問に思っていたところで、メイドが紅茶を目の前のテーブルへ置いた。ふわりと漂う品のいい香りに思わず笑みがこぼれる。

「これは……カモミールの葉ですね……？ とても上質な良い香りです」

「ほう！ フィガロ殿は茶葉にもお詳しいか！ あれほどの強さに加えてお茶を嗜む教養をお持ちとは……いやはや、うちの者が失礼いたしました」

あれほどの強さ……？

誰かと間違えているのではないだろうか。

「あ、いえ！ これはたまたま！」

「ご謙遜を。いやしかしフィガロ殿、メイドの格好とは違って今日はキリツとされておりますなあ！ 本来はそちらが普段のお召し物ですか？」

「ぶっふおあ」

伯爵の爆弾発言に、飲もうと口に含んだ紅茶を思い切り噴き出してしまった。

今、なんと言った？ メイドと言ったか？

「おやおや、大丈夫ですか？ 湯気でむせられたのですか」

吹き出してしまった紅茶をメイドが丁寧に拭き取ってくれるのを見ながら、背中に変な汗が吹き出てくるのを感じた。

「い、いえ……あの、メイド、って」

「祝勝パーティの時ですよ！ 我らの危機に颯爽と立ち上がり、悪魔將軍に臆しもせずに挑む勇猛果敢さ。今思い出しても惚れ惚れいたしますなあ。ぜひうちの息子に、一度会っていただきたいものですよ。今はパートナーはいらっしゃるのですか？」

伯爵の一言一言に、汗が増していくのを感じる。

あの会場にいたのか……。

祝勝パーティには国の重鎮が多く呼ばれている、と俺につけてくれたメイドのレミーが言っていたことを思い出す。

もはや、触れないで欲しい黒歴史を驚掘みされているような気分だ。しかも未だに、俺

が女だと思っているらしい。

「あ、あはは……ま、まあそんな事もあり、ありゃんしたねえ！ あははは！ ほ、ほら！ そんな事より私やあジャイアントクインビーの処理が銀貨でそれがアレでございましてですわね!」

冷静に話そうと思えば思うほど、口が離反して訳の分からない事を口走っていく。どうやら結構なメンタルブレイク具合らしい。

「はっはっは！ フィガロ殿は強く可愛らしい上に、教養とユーモアもお持ちの様子。フィガロ殿に、ジャイアントクインビーの始末のような雑務はもつたいない。他の冒険者にやらせますので、どうでしょう？ 今晚あたりうちの息子も交えてお食事など」

この伯爵はダメだ。自由冒険組合の十等級冒険者としてじゃなく、あの時のフィガロとしか俺を見ていない。

このままでは埒が明かない。

ぐわんぐわんと揺れる視界の中で、必死に断るための言葉と言いつつ訳を探す。

しかし俺の意思から離反した口は話すことも放棄したらしく、ただバクバクと動くのみだった。

「あの！ お誘いは大変嬉しいのですが、今晚はドライゼン王に謁見しなければならぬので！ はい！ あと冒険者としての初仕事ですので、出来ればサクッとパパッと終わら

せたくですね！ はい！」

必死の思いで紡ぎ出した言葉は、ドライゼン王の威を借りたなんとも中身の無い言い訳だった。

「なんと……陛下との謁見がおありでしたか……それは残念です。であればぜひ別の機会にでも」

「はい、残念ですね！ ははは……」

「分かりました。依頼されたお仕事を完遂しようとするそのお心意気、しかと受け止めました。おい、フィガロ殿をあの場合へご案内するんだ。くれぐれも失礼のないようにな」

なんとか伯爵から解放され、裏庭へと案内された。

裏庭も敷地に比例してかなり広く、大きな池があつたり小さな果樹園のような場所も見受けられたりした。

「すごいですね」

「はい、伯爵様は庭いじりが好きな方として、果樹の剪定などもご自分で行っているのですよ。先ほどお出したハーブティーのハーブも、この庭で栽培されているのですよ?」

「そうなんですか!? 自家栽培とは凝ってますね……」

クインビーの巢まではそれなりに距離があつた。無言というのも気まずいので、庭に敷かれた砂利道を歩きながら、メイドと話をしてみる。

庭に植えられた木々や草花には管理が行き届いているようだ。

しっかりとトリミングされ、緻密な計算のもと配置された美しさは、王宮の花壇にも匹敵するのではないかと思う。

「伯爵様の育てるハーブは、王宮から取り立てられるほど高品質なんです。ですがご子息様は以前お見合いの話があった際、伯爵様に庭のことなど庭師に任せればいい、と仰っていましたね。何ぶん園芸に興味のないご子息様ですから……私共としては、この素晴らしい庭を保持していきたいと思っているのですがね……血氣盛んなご子息様には、あまり価値のない物と見られているのでしょうか……」

伯爵は息子と折り合いが悪いのだろうか？

王宮に取り立てられるほどのハーブを生み出す庭なら、存続させる価値はあるんじゃないだろうか。

確かに庭いじりは地味だし、若い男がやるようなイメージはない。

農園の息子なら分らないでもないが、国の重鎮とも言える伯爵の息子だ、何か思うところがあるのだろうか？

「こちらです」

世間話に花が咲きかけた頃、目的の場所に着いた。

ジャイアントクインビーの巣の周りは簡易的な柵が設置されており、不用意に立ち入る

事がないように対策されていた。

巣の後ろには塀があり、塀に沿って植えられた観葉樹の幹を中心に十メートルほどの横長の巣が形成されている。

依頼を受けた時は炎で燃やしてしまえばいいと考えていたのだが、今はこの愛がこもった庭を少しでも傷付けないようにしたいと思っている。

炎で焼くのは簡単だが、炎の余波で植物がダメになる可能性もある。

ジャイアントクインビーは一メートルほどの大きさの蜂型モンスターであり、比較的どこにでも巣を作る傾向がある。

巣は大きい物で五十メートル規模の物も確認された事がある。

個体が大きいため巣も大きくなるのだが、脅威なのはジャイアントクインビーではなく、クイーンを守るオス蜂で構成される軍隊蜂の存在なのだ。

成虫になったオスの蜂は約七十センチにもなる。

オス蜂は群れでの行動を基本とし、腹部にある鋭い針を武器として敵に襲いかかる。

ただの大きい分、剣や盾で充分対処が可能ではある。

目の前にある巣は出来たばかりのようで、成虫の姿は見受けられるがほんの数匹程度であり、大した問題ではない。

巣の周りには伐採された跡があるので、発見当時は草や木に紛れていたのではないかと

思われる。

「ある程度の被害は伯爵様も容認されております。よろしくお願いいたします」

「分かりました、少し後ろに下がっていただきます」

巢の全体を視認した後、どうしようかと逡巡する。害虫駆除の基本は薬剤散布や焼却。

もし魔法で対処するのであれば広範囲に効力のある魔法が必要になってくる。虫型モンスターの弱点属性は水と火、火を使わないのなら水の魔法一択しかない。

記憶の中の魔法事典から水属性の魔法を取捨選択していく。

「【フロストミスト】」

結果、選択したのは半径二十メートルに水の霧を発生させる魔法だった。

これは水の霧に吞まれたら最後、一気に対象を水漬けにする魔法なのだが、今回は効果範囲をギリギリまで縮小して使用した。

イメージを強く固めれば範囲を狭める事だって可能なのだ。

霧が晴れるとそこには水漬けになったクインビーの巢が露わになり、氷の彫像のようになっていた。巢の周辺で動く気配はない、どうやら成功のようだ。

「すごい……こんなあつという間に……」

メイドが感嘆の声を上げバチバチと小さく拍手をしてくれた。処理にかかった時間は一分ほどだが、これでもすごいと言われるのはとても気持ちが良い。

水漬けになった巢に近寄り、背負っていた剣を巢に突き立てる。途端にそこから数条の亀裂が入り、バキバキと音を立てて巢は崩壊した。

「水漬けになった時点で生命活動は停止しているはずですが、念のため死骸は焼却炉にでも放り込んでおいてください。あとこれが確認出来た幼虫六十匹全てです。巢が出来たてだった分、小さかったので苦労もなかったですよ」

屋敷に戻り、伯爵へ巢の処理完了の報を入れた。

砕いた巢から出てきた幼虫はメイドから籠を借りてその中に入れてある。

伯爵は床に置いた籠の中を覗き込み、幼虫の数を数えている。

「はい、確かに確認しました。ご苦労様です。しかし出来たてとはいえものの数分で片付けてしまうとは……さすが、としか言いようがありませんなあ！ はっはっは！ これが報酬です。幼虫の分の追加報酬も入れてあります。受け取ってください」

「ありがとうございます。ですが水漬けの幼虫を何に使うのです？」

「はっは！ 博識なフィガロ殿でも知らぬでしょうが、蜂型のモンスターの幼虫は栄養満点、疲労回復や滋養強壮の効果があるのですよ。調理して食べたり漢方薬などにも使われたりしておるのですがね。水漬けにするという発想はありませんでしたなあ。氷の中に閉じ込めれば腐敗もない、実に画期的だ」

ホクホク顔の伯爵は謝礼の袋を俺に手渡しして、実に衝撃的な事を言った。



虫を食べるなんていう発想は思いもよらなかったが、どこかで聞いた事もあったので、愛想笑いだけを返しておいた。

袋を開けて確認すると、依頼料と追加報酬分がしつかりと入っていた。

「よろしければどうです？ 今から軽くビーワームの料理など」

「い、いえ！ 興味はあるのですがこの後も予定がありますので！」

「そうですね！ フィガロ殿は多忙の身、冒険者になりましたてゆえ、ですか？ 応援しておりますぞ！ 何か困ったことがあればすぐに言ってください、私であればご助力いたしますのでな！」

「はい、ありがとうございます。では失礼します」

非常に残念そうな顔だったが、固い握手を交わすと結構あつさりと解放してくれた。

お腹は空いているが、だからと言って虫を食べる気にはなれない。

俺は伯爵の厚意に複雑な感謝を抱きながら、屋敷を後にした。



伯爵家を出てすぐ、腹の虫を黙らせるために串焼き屋さんへと猛ダッシュ。

記憶に残るあの香ばしい味に、知らず知らずのうちにヨダレが出てくる。

太陽は沈みかけ、街は黄昏色に染まっていて、家路につく学生らしき集団や疲れた顔の衛兵達の姿が見受けられる。街灯にも明かりが灯り、夜の帳が降りるのももう少しといったところである。

「すいません！ 串焼きください！」

「おう、いらつしやい！ 元気いいねえ！ もうすぐ店じまいだ、安くするからいっぱい買ってってくれ」

多くの店は黄昏時を過ぎると店を閉めてしまう。

遅くまでやっている食事処もあるにはあるが、そういった所はお酒処も兼ねていたりするのでイマイチ入りづらかった。

逆にトワイライトのようなお酒処は、黄昏時を過ぎてからお店が開く。

朝から働く人達と、その人達をねぎらう夜の世界。

この二つが上手に噛み合って、ランチアの街は一日中活気づいているのだ。

そして俺は、冒険者となった記念と初依頼達成のお祝いを兼ねて、串焼き屋さんで貝の串焼きと鶏肉の串焼きを一ダースずつと、果実ジュースを購入していた。

串焼き屋さんの店主がおまけとして数種類の串焼きも一本ずつつけてくれたので、代金を支払って小躍りしながら噴水広場へと赴いた。

街には一定間隔で噴水広場が設けられており、住人達の憩いの場となっている。

タルタロス武具店は夜遅くまで店を開けている、と串焼き屋さんの店主に聞いたので、少し休憩することにしたのだ。

噴水広場に辿り着いた俺は空いているベンチに腰かけ、串焼きの詰まった紙袋を広げた。むわっとした熱気と香ばしい香りが鼻腔いっぱいに広がり、思わず涎が垂れてしまいそうになる。

「いったただきまーす。あんぐ……んん！ やっはりおいひい……染みるうー」

貝の串焼きはピリ辛の味付けになっていてあつという間に一ダースを食べ切ってしまった。

串焼きで渴いた喉を果実ジュースで潤すと、おまけでもらった串焼き達に手を伸ばし、道ゆく人々を眺めながら串焼きを口いっぱい頬張って、一囃み一囃み堪能していく。

「平和だなあ……」

子供連れの夫婦は噴水と戯れる子供を微笑ましく見ており、カップルと思しき冒険者はベンチに座り何やら話し込んでいる。

犬の散歩をする老人はひどく腰が曲がっており、犬の方が老人の歩幅に合わせて歩いている。

皆思い思いに道をゆき、思い思いに時間を過ごしている。

ついこの前、悪魔騒動やアンデッドの大襲撃があったとは到底思えない平和さだった。

いずれは俺がこの平和を守っていく立場になるなど、未だに実感が湧かない。

そして道ゆく人々も、噴水広場のベンチに座っている俺がそのような存在だとは、夢にも思わないだろう。

じきにフィガロという名が辺境伯として知れ渡る。

分不相応だとは思うけれど、次期国王となる前準備みたいなものなんだと思う。

「家名かあ……どんな名前にしよう……剣の名前も決めてないのにな……ていうかそもそもシャルルと結婚したら俺の家名はランチアになるんだよね？ 一時的な家名として考えれば気も楽か……どーしよ……」

平和であるのはいい事だ。

だが、戦争や冒険というバイオレンスでスリリングな世界もまた平和の裏に隠れている。世界中至る所で戦争が起き、冒険者が命を賭してモンスターと戦い、様々な人が命を散らしている。

アルウインは戦の家系でもあった。

ルシウス兄様やヴァルクュリア姉様だって戦っている。

優れた魔法力や知識は、何も安全なものにだけ使われるわけではないからだ。

ヴァルクュリア姉様が専門としている魔導技巧などの知識や技術は、国を守るため、発展させるだけに留まらず戦争に使われる事もある。

ヴェイロン皇国の至宝<sup>しほう</sup>とまで言われるルシウス兄様の剣技は、戦闘方面に極振りされた力だ。

父様だって領地を守るために他貴族への牽制<sup>けんせい</sup>や腹芸など様々な争い<sup>あそ</sup>を経験しているはずだ。

そして俺にも、アルウィン家を追放されたと言ってもその血がなくなるわけではなく、しっかりと引き継<sup>つ</sup>がれている。

現に俺は冒険者という、平和とはかけ離れた世界に身を置くことにした。

そしてドライゼン王の跡を継ぐという事は国を守るという事。

それはつまり世界の各国と向き合うという事。

出来る出来ないを考えてしまいが、俺がシャルルと結婚してしまえば出来る出来ないじゃなく、やるしかなくなるのだ。

道ゆく人々を眺めながらそんな事を考える。

気付けば串焼きの袋は空<sup>から</sup>になっており、果実ジュースも底をついていた。

日はとつぷりと沈み、街灯が闇を照らしている。

それでも街をゆく人々の様子は変わらず、様々な人々が道を往来している。

「考えても仕方ないな。そろそろ行こう」

空になった紙袋と果実ジュースのカップをゴミ箱に投げ入れて、意識を切り替える。

軽く伸びをして、満腹になった腹を撫<sup>な</sup>でながら、俺はタルタロス武具店へと足を向けた。



「はい、ご苦勞様です。報酬がこちら銀貨二枚ね」

「ありがとうございます」

翌日、俺は朝から組合に行き、手頃で手軽な依頼を消化していた。

昨日タルタロス武具店に行き、クーガの鞍と鎧の制作依頼を出したところ、鞍と鎧以外の品物、頭絡<sup>うちわく</sup>や手綱<sup>たづな</sup>などの一式も含めて金貨一枚でやってくれると言ってくれた。

通常の馬具一式を揃えるので大体金貨一枚ぐらいのお値段らしいのだが、やはりクーガの場合サイズの問題があるので特注だそう。

なるべく丈夫な素材で作りたいと伝えたところ、それも了承した上でのこのお値段である。

どうして安くしてくれるのかと聞いたら、どうやら俺の品物で新技術<sup>なうぎゅつ</sup>を試<sup>な</sup>してデータなどを取りたいのだそう。

代金は品物の受け渡し時に払う事になった、数日もあれば出来るそうなのでそれまでに金貨一枚を用意すればいい。

なので俺は金策をするべく、朝から依頼を受けて回っているのである。

夕方には王宮へ赴き、シャルルを迎えに行かないといけないからな。それにいつまでも床で雑魚寝をするわけにもいかないのでベッドや家具、雑貨なども揃えていかねばならない。

屋敷に元々あった家具類も屋敷同様に、なぜか復活を遂げて使える状態にあるのだけど……やっぱり一人暮らしをするなら、自分で家具を揃えたくなるってものだ。

「これで銀貨十枚だから……金貨に両替しておくか」

組合の受付で報酬を受け取り、素材管理部のカウンターへ赴いた。

受付は依頼の受理や事務系などを主としており、両替は素材管理部の仕事だ。

両替は黄銅貨、青銅貨、銅貨、銀貨、金貨、王金貨のどれも対応してくれ、金貨を銅貨と青銅貨に、などという細かい両替も可能だ。

金貨までは十枚で一枚という比率で両替出来るが、王金貨だけは金貨百枚で一枚となる。朝一から山の頂上に生えている薬草の採取や、ランチア国領の外れにある村に行つて依頼された品物を届けたりと、合計四件の依頼を消化して大忙しだった。

移動は【フライ】で行ったので移動時間の短縮が出来てかなり楽だった。【フライ】がなければ四件も依頼をこなすのは不可能だったろうからな。本当に便利な魔法だよ、【フライ】 様様だ。

報酬は合計で、銀貨五枚、銅貨二枚、青銅貨八枚、という感じ。

それに加えて昨日、伯爵家でもらった報酬の残りを含めると、金貨一枚には充分。お金を稼ぐのは大変だ、とつくづく思った。

時刻はもう昼を過ぎて、あと数時間程度で太陽が沈み始める。

疲れはしなくても汗はかく、朝から動き回っていて体中が汗でベトベトである。

一度屋敷に戻り風呂に入ってから出ないと、シャルルに汗臭いと思われてしまう。

【フライ】

組合の建物から出て裏手の路地に入つて【フライ】を発動、そのまま屋敷へと飛んで帰った。

屋敷に着くと大急ぎで風呂に入り汗を流し、体の火照りもそのままに服を着替えて再び【フライ】で王宮へと向かった。

「え?」

いつも通り橋のたもとからクーガに乗り、橋を越えようと、王宮の扉の前には既に馬車が停まつており、兵士達が忙しなく動いていた。

そこにはシャルルの執事であるタウルの姿もあった。

一体何事だろうか。

「これはこれはフィガロ様」

「こんにちはタウルスさん、これは一体？」  
 「はて？ 私達はシャルル様からフィガロ様と離宮へ赴くと言われているのですが……その準備にございます」

「あー」  
 なるほど。

シャルルはトワイライトに行くのではなく、離宮に行くと行って外出許可を取ったのだろう。

外に出て途中で行き先を変えるつもりなのだろうか？

「フィガロ！ クーガ！ 待ってたわよー！」

「シャルル！ なんだったのか」

『待たせたようだなシャルルよ』

馬車の窓が開き、シャルルが手を振っている。どうやら最初から中で待っていたようだ。  
 「なんだじゃないわよーもう。楽しみだったんだから仕方ないじゃない」

「ごめんごめん」

「さ、乗って！ クーガはしばらく影でお留守番ね」

シャルルは満面の笑みで手招きをしている。俺も馬車に乗らなければならないらしい。  
 クーガを影に戻し、王家の紋章が刻まれた馬車に乗り込む。

## 立ち読みサンプル はここまで

その際、鋭い視線を送ってくる騎士の姿が目に入った。

王宮に入る扉の脇に赤い鎧の守護騎士が立っており、その騎士が物凄い形相で俺を睨み付けていたのだ。

「シャルル、あの人は」

「彼は守護騎士の一人よ。あまりフィガロを良く思っていないみたいね」

「そうか……」

「気にしないでいいわよ。特に何かしてくるわけじゃないわ。むしろそんな事をすれば自分の立場が危ういと分かっているはずだもの」

「分かった」

馬車に入り、馬車の扉が閉まった事を確認して、さりげなく窓から守護騎士を盗み見る。  
 俺が馬車に入ったにもかかわらず、守護騎士の視線は変わらない。

守護騎士に恨まれるような事は何もしてないはずなのに……。気にするなと言われても気になってしまう。

その後、王家の馬車に揺られて約二十分。

俺はシャルルと共に、サーベイト森林公園内にある離宮へと来ていた。

王宮から離宮へは、王宮関係者しか通れない道で繋がっており、通常の街道よりも早く着く。